

「あまえる」ということについて

第47回全国小・中学校作文コンクール 作文優秀作品

一、セロのゴージュ

ゴージュは、金せい音楽だんのセロをひくかかりでした。けれども、なか間の楽手の中で一ばん下手で、樂ちようにいつもおこられてばかりいました。町の音楽会の十日まえには、「おこるもよろこぶも、かんじょうがまったく出ない」とどなられました。すると、ゴージュは、セロをかかえてかべのほうをむいて、口をまげてぼろぼろになみだをこぼしました。

ひとりぼっちでだれにもあまえることができないゴージュは、おこられるといつもそうやってくやしい気もちも、かなしい気もちも、いやだと思つ気もちも、みんながまんしたのです。

ゴージュは、ぼろぼろないたあと、気をとりなおして、じぶん一人だけでれんしゅうをはじめます。でも、わたしは、ゴージュのがまんが、一生けんめいれんしゅうする気もちにつながるとは思いません。

だれも気がついていないけれど、ゴージュの心の中には、へんなものがたくさん入っています。へんなものというのは、その人によってちがうけど、じこまん足だったり、つよがりだったり、がまんのしすぎだったり、色んなものがあります。そういうへんなものが心の中に入っていると、本当のじぶんがちやあんと見えません。ゴージュは一生けんめいれんしゅうしているつもりだけど本当のじぶんがちやあんと見えていないので、本当のれんしゅうができていないのです。本当のじぶんをちやあんと見ないでどんなにがんばっても、まちがったがんばりかたしかできません。それは、本当のがんばりにつながりません。

けれども、きせきがおこります。

樂ちょうつにどなられたばんにねこが、つぎのばんにかっこうが、そして、たぬきが、のねずみが、じゅんばんにゴージュのいえにやってきます。

どつづつたちに、いろいろ言われながられんしゅうしているうちに、ゴージュは上手になりま

す。音楽会で、みんなはゴーシュが上手になったことに気がついて、ゴーシュをアンコールのぶ
台に出します。それでもじぶんが上手になったことに気がつかないゴーシュは、「どこまで人を
ばかにするんだ」と、おこって、ねこにひいた時と同じように、「インドのとらがり」をひきま
す。おこってひいたのが「インドのとらがり」にはびったりだったのでしょう。ちょうしゅうは、
しいんとなって一生けんめいきき入ります。あたまの中が「インドのとらがり」のきよくでいっ
ぱいになって、しんけんな気もちになったのだと思います。

わたしは、「インドのとらがり」というきよくをきいたことはありません。だけど、とらをつ
かまえるなんて、人間には、わくわくはらはらドキドキするきよくだと思います。でも、とらと
同じなか間のねこには、じぶんがころされるかもしれない、とつてもおそろしいきよくです。そ
れを、ゴーシュがねこにがんがひいた時は、わたしは、ねこはこのまましんでしまつかと思っ
たくらいです。

「ゴージュは、ねこにひどいことをしたと思います。「トロイメライ」と言ったのに、ねこには「ばんいやだろ」と思われる」「インドのトラがり」をひいたのですから。ひる間樂ちょうになられたむしゃくしゃをみんなぶつけておこりまくり、こわがってパニックになっているのをおもしろがり、さいごには、ねこのしたでマッチまですったのですから。

「ただ、ゴージュは、そうやって、今までがまんしていたむしゃくしゃをぜんぶ外に出せたので、かんじょうを出してきよくがひけるようになって、みんなをかんどうさせたのだと思います。」

「ゴージュは、かんじょうをだせるようになりました。ゴージュがかんじょうを出せるようになったのは、ねこのおかげです。ねこは、そのために、やってきたのだと思います。」

「つぎのばんにやってきたのは、かっこうです。」

「かっこうは、ゴージュに「ドレミファ」をひかせ、そのたびに「ちがいます」と言っでは、また何回もひかせました。そうやってひいているうちに、ゴージュは、かっこうのぼうが上手な気

がしてきます。ゴーシュは、じぶんがとても下手なことに気がつくのです。

ゴーシュは、今まで、樂ちようにおこられるから、ないたり、れんしゅうしたりしていています。あんまり上手ではないというひょうばんを気にしていたのかもしれない。それは、ゴーシュが、本当にじぶんは下手だと思ってれんしゅうをしていなかったということです。だから、かつこうは、「ドレミファ」を何回もやらせて、ゴーシュに、本当のゴーシュを見せたのです。

ゴーシュは、本当のじぶんを見て、本当のじぶんが本当に下手だとわかると、その下手なじぶんを見ているのがいやで、「ドレミファ」をひくのをやめてしまいます。

「なぜやめたんですか、ぼくらならどんなにくじないやつでも、のどからちがでるまではさげぶんですよ」「その時、かつこうはそう言います。

わたしは、このことばを、とても大じなことばだと思いました。わたしは、このことばを、じぶんのために何回も何回もこえに出して言ってみました。

かつこうは、かつこうという名まえがついているくらいだから、「かつこう」とうたえてこそのかつこうです。ゴーシュは、「セロひきのゴーシュ」「というおはなしのしゅ人こうなんだから、セロがひけてこそそのゴーシュです。

生きるこつてそついうことだと思ひます。

だれにでも、一生をかけてやりとおさなければならぬ、かみさまからもらったみたいになんことが、一つはあると思ひます。それをやらなかつたら、その人は、本当のその人ではなくなつてしまふような大じなことです。かつこうが「かつこう」とうたつこと。ゴーシュがセロをひくこと。わたしにも、そついう何かがあると思ひます。そついう何かをやりとおさなくても、生きることが出来るけど、それをやりとげていくことが、本当に生きるしごとをしたといふことになつたと思ひます。わたしは、そついう生きかたがしたいと、かつこうのことは聞いて思ひました。

「ただ、ゴーシュは、かつこうの」とばを聞いて」「出ていけ」と言いました。そうしたら、かつこうに「もうーペン」と言われたので、「朝めしに食ってしまうぞ」と、どんとゆかをふみならしました。かつこうは、びっくりしてにげ出そうとして、ガラスにぶつかってじゅうしょうをおきました。

「ゴーシュはあとになって、この時のことを「おれはおこったんじゃないか」と言っています。わたしもそうだと思います。」

「ゴーシュは、本当は、本当のじぶんをわかっていなかったんじゃないか」と言っています。でも、本当のじぶんはとてもひどいので、見ないようにしていたんだと思います。それなのに、かつこうにだめなじぶんを見せられて、そのだめなじぶんにカッとなって、そのむしゃくしゃをかつこうにぶつけてしまったんだと思います。」

でも、ゴーシュは、本当のじぶんをちゃんと見ることができたから、むしゃくしゃしたので

す。ゴーシュは、かつこうのおかげで本当のじぶんをちゃあんと見ることができるようになったのです。かつこうは、そのためにやってきたのだと思います。そして、どんなにつらくても、がんばってセロをひかなきゃだめだよと、教えたかったのだと思います。

三日目のばんにやってきたのは、たぬきの子です。

ゴーシュは、かつこうと同じようにおいはらってやるうと思っていたのに、たぬきの子とはなしているうちにわらい出してしまいます。でも、さいしょのうちはむりにこわい顔をして「たぬきじるにして食べてしまっぞ」と、おどします。だけど、たぬきの子は、おとうさんに、「ゴーシュさんはとてもいい人だ」と言われて、ゴーシュをいい人だとしんじています。

ふつつの人は、じぶんをしんじている人にいじわるやひどいことをする気もちにはなれません。

ゴーシュは、このばん、この本の中ではじめてわらいました。たぬきの子の人をしんじるあかるいきれいな心が、きつかったゴーシュの心をゆるめたのです。そして、ゴーシュのわらいごと

いつしよに、心の中のへんなものがだんだんなくなっていったのです。そうして、すなおになつたゴーシュは、たぬきの子に「二ばん目の糸をひくときおくれるねえ」と言われて、「そうかもしれない」と言えるようになっていました。そして、どうやったら上手になるだろうと、一生けんめいれんしゅうしました。

ゴーシュは、はじめて本当のれんしゅうができました。たぬきの子が、ゴーシュの心をすなおにしたからだと思います。

四日目のばんにやってきたのは、のねずみの親子です。

のねずみは、どうぶつたちが、びょう気になると、ゆかの下にもぐって、ゴーシュのセロをきいてびょう気をなおすことにはなしました。のねずみがなくてたのむので、セロをひいてやると、本当にねずみの子のびょう気がなりました。のねずみが「ありがとうございます」と十回ぐらい言うので、ゴーシュはかわいそうになってパンまであげました。

ゴーシュはひとりぼっちじゃなかったのです。下手でだめだと思っていたセロは、どうぶつたちのびょう気がなおるのでかんしゃされていたのです。ゴーシュの心があたたまります。それでゴーシュは、のねずみにやさしくできるようになったんだと、わたしは思いました。びょう気がなおってパンまでもらったのねずみは、ないたり、わらったり、おじぎをしたりしてかえっていきます。のねずみは、ゴーシュの心をあたたためにやってきたけど、ゴーシュのやさしさで、のねずみの心もあたたまったんだと思います。

これが、心と心をつくっつけ合うということです。

みんなひとりぼっちじゃないのはいいなあ。たすけ合うのはいいなあ。ゴーシュが、やさしいゴーシュにもどれてよかったなあ、と、わたしは思いました。

ゴーシュが、音楽会のアンコールで「インドのトラがり」をひいたのは、そのばんから、一週間じのできごとです。楽ちょうは、「十日まえとくらべたら、まるで赤んぼうとへいたいだ」と

言ってほめ、なか間のみんなは、「よかったぜ」と言います。ゴーシュはみんなにほめられて、はじめてじぶんが上手になったことに気がつきます。

みんなは、ゴーシュが上手になったことをきせきだと思っているようです。でも、それはきせきではありません。それは、ゴーシュが、本当のじぶんをちゃあんと見て、本当の心で一生けんめい本当のれんしゅうをしたから、できたことです。

わたしの言うきせきは、ゴーシュのところへどうぶつたちがやってきたことです。それが本当のきせきです。ゴーシュもそのことに気がつきます。だから、その日いえにかえってから、かっこうに「すまなかった」と言うのです。ゴーシュはその時は言わなかったけど、ねこやたぬきやのねずみにも、きつとかんしゃしたと、わたしは思います。

「セロひきのゴーシュ」のおはなしはここでおしまいになります。

わたしは、このおはなしを読みおわって、へんだと思うことがあります。ゴーシュは本当に下

手だったのかな。へんだと思います。だって、下手だったら、どうぶつたちのびょう気がなおるわけがありません。わたしは、ゴーシュは本当は上手だったんじゃないかなと思います。わたしは、それで、ゴーシュがどうしても下手になってしまったのか、考えてみました。

ゴーシュは、町はずれのこわれた水車小やにたった一人すんでいます。きつと、なかよしのともだちも、だれもいなかったと思います。それでゴーシュはじぶんが一人ぼっちだと思って、だれにもあまえることをしないで、がまんして心をきつくしてしまっただんだと思います。そして、本当のじぶんが見えなくなって、本当の心でれんしゅうができなくなってしまったのだと思います。おまけに、セロもおんぼろです。ゴーシュはますます心をきつくして、下手になってしまったのだと思います。そうして下手になったゴーシュは、じぶんが下手なので、またもっと心をきつくして、もっとだれにもあまえられなくなっていきます。そうして、ゴーシュの心がへんなものでいっぱいになって、まい日どんなに一生けんめいれんしゅうしても、セロが上手にならなく

なってしまったのではないかと思えます。

一人でがまんしてないと、心がかなしくなります。そして、じぶんのやさしさをうしなってしまうのです。そうしてがまんしすぎて、一人ぼっちで心をきつくしていると、心がわるいほうへいつてしまいます。本当のじぶんではないじぶんになってしまうのです。そしてほうっておくと、もう本当のじぶんにはもどれません。

ゴーシュは、そうなってしまったところを、どうぶつたちにたすけてもらいました。どうぶつたちは、本当のゴーシュのやさしさと、本当のゴーシュがひくセロが大すきだったのです。それで、ゴーシュの心がへんなものでいっばいで、どうぶつたちの知らないへんなゴーシュになってしまふのがいやで、やってきたのだと思います。人は、一人ぼっちではいけません。人は、がまんしすぎてはいけません。人は、いつもみんなでくらさなければいけません。一人ぼっちで、いつもだれにもあまえることができないと、かなしい人になってしまいます。

ゴーシュに、どうぶつたちがいてよかったなあと思います。

じつは、わたしは、アンコールのきよくが「インドのとらがり」だからよかったけど、やさしいきよくや、うつくしいきよくや、かなしいきよくや、ゆかいなきよくだったら、ゴーシュは、みんなにほめてもらえなかったんじゃないかって心ぱいしました。だって、アンコールの時は、九十九パーセントしか、本当のゴーシュにもどっていないからです。でも、ゴーシュはみんなにほめられて、じぶんが上手になったことをして、どうぶつたちのおかげだと気がついた時、百パーセント、本当のゴーシュにもどれました。わたしは、本当によかったと思いました。これからは、ずっとどうぶつたちがついていけるから、ゴーシュはもう大じょうぶだと思います。

(めでたし、めでたしです。)

「わたしは「ゴーシ」だった

わたしが、ようちえんの年中のまん中へんのころだったと思います。

「さきのこと、ずうつとだっこしていなかったから、だっこしてあげようか」と、おかあさんが言ったことがありました。いもうとのまきがへやにいない時でした。

わたしは「いい」と言いました。

「どうして」

「まきがおかあさんにだっこしてほしいと思った時、いつでもだっこしてもらえるように、わたしはもうだっこしてもらわなくていいの、まきがだっこしてほしいと思った時、わたしがだっこしていたら、まきがだっこしてもらえないでしょう」

おかあさんは、その時、一生けんめいな顔をして、わたしをだきしめてくれました。おかあさ

んは、「11の日のことをずっとわすれない」と言います。「さきがそんなにだっこしてほしがっていることを、この時まで気がつかなかった」と言います。

わたしもぜったいにわすれないと思います。だって、その時のだっこが、わたしのおぼえてい
るさいしょのだったからです。これよりまえのだっこを、わたしはおぼえていません。

わたしは、ようちえんの時、とてもつらかったです。ともだちが一人もいませんでした。わたしは、ようちえんがきらいでした。中でも一人ぼっちでさみしい外あそびの時間が大きらいでした。外あそびの時間、わたしは、にわのすみにある石でできた白ちようやぞうのせ中によって、その白ちようやぞうとあそびました。

わたしはふしぎでした。わたしのすがたは、だれにも見えないみたいでした。だれもこえを
けてくれませんでした。えんていにいる先生たちも、大ぜいいるともだちも。

年しょうの一学きには、わたしにもなかのよいともだちが二人いました。だけど、一学きがは

じまった時、二人はべつのもだちとなかよしになっていました。わたしは、まい日、二人がまえのように、「あそぼう」と言ってくれるのをまっています。でも、二人は、わたしのところへはこないで、そのべつのもだちとばかりあそびました。それは、いばりんぼでわたしがきらいなともだちでした。「まぜて」と言うと、二人はまえと同じようにあそんでくれます。だけど、いばりんぼのもだちもいっしょです。わたしは、そのいばりんぼのめいれいを聞いてあそばなければいけないのが、いやでした。わたしは、そんなわけで、そのなか間に入るのをだんだんやめていきました。

今思うんだけど、わたしがその子をきらいだったように、その子も、わたしのことがきらいだったのかもしれない。わたしにはいばりんぼだったその子も、わたしい外のもだちにはやさしかったように思います。

わたしは、二人のもだちが、わたしのところへ早くかえってくるようにねがいました。だっ

て、その二人のことが大すきだったのです。三人であそんだ時、とてもたのしかったのです。はんぶんはかえってこないと思ったけど、もうはんぶんは、きつとかえってくると思いました。そうしてずっとまって、わたしは、ほかのともだちを作る気になれませんでした。わたしは一人になりました。そして一人ぼっちになって、ずっとともだちとあそばなかったので、どうやってともだちとあそんだらいいのか、わからなくなっていきました。年中の一学き、ともだちなんかできなくていい、いららないと思いました。

わたしのようちえんのたんじんの先生は、わたしがつらいのをわかってくれませんでした。先生は、わたしがなくしものをしてない時と、だれかにいじめられてない時と、ころんでない時にだっこしてくれました。わたしは、何でもないふつうの時に、だっこしてもらったことがあります。わたしは、先生にだっこされてにこにこわらっているともだちが、うらやましかったです。わたしも、ないていない時にだっこしてもらいたかったです。

わたしが年ちょうになった時、いもうとのまきが年しょうに入えんしてきました。わたしは一人ぼっちじゃなくなったと思つてよろこびました。でも、おかあさんは、わたしが、まきや、まきのクラスのたんぼぐみさんとばかりあそぶのをしんぱいしました。二学きのはじまりの朝、おかあさんが、「ようちえんでは、二人であそんじゃだめよ。さきは風ぐみさんと、まきはたんぼぐみさんとあそびなさい」と言いました。わたしは、「風ぐみさんとずつつとあそんでいなければ、わたしはかしくつて、『あそぼう』と言えないの」とはなしました。おかあさんは、ようちえんで、わたしがつらいのはわかつていたのだと思います。「先生に、そのことおはなししよな」と言いました。わたしは、心のなかで「おかあさん、ありがとう」と言いました。

ようちえんにつくと、おかあさんは、ちようどえんていにいた先生に、わたしがともだちとあそべないことをそうだんしました。すると、先生はおどろいた顔をして言いました。

「さきちゃんは、教しつでは、いつもおともだちとあそんでいるから、大じょうぶだと思ひます

けど」先生のことばがはつきりと聞こえました。

わたしは、先生とおかあさんのはなしが気になって、あそんでいるふりをして、耳をすましていたのです。（先生は、わたしのこと、見てないなあ……）。

わたしは、先生は、わたしがともだちがいないのをしっていると誤って思っていました。だって、先生は、年しようの時も、年中の時も、ずっとわたしのたんになんだったのです。わたしのことを見ていたらわかるはずですよ。

「さきちゃんはおともだちがいません。何とかしましょう」と、本当のことをちゃあんと聞いてほしかったです。でも、もし本当に気がつかなかったのなら、「さきちゃん、おともだちいないの？」と、わたしにちゃあんと聞いてほしかったです。先生は、そのどちらもしてくれませんかでした。わたしは、この時からこの先生を、わたしのことわかってくれないわるい先生だと、思うようになりました。

おかあさんが、「よろしくおねがいします」をしてかえると、先生は、わたしが見ているまえで、風ぐみの二人の女の子の名まえをよびました。「さきちゃんが、おともだちがいないと言っているから、あそんであげてね」こんども、はっきり聞こえました。二人の女の子が「はい」とへんじをするのも聞こえました。だって、わたしは、すぐちかくにいたのですから。

二人の女の子は、先生から何かを聞かれた時におはなしするのが上手で、絵や工作もとくいです。いつも先生にほめられていて、わたしが、うらやましいと思っている女の子たちです。学校でいえば、「べん強ができる」と言われている人たちと同じです。わたしが風ぐみの中で、一ばんせいせきがいいと思う女の子たちでした。

二人の女の子は、その日から、まい日まい日わたしとあそんでくれました。わたしはとてもうれしかったです。だけど、二人の女の子は、わたしが好きだからあそんでくれたわけではありません。先生にたのまれたからあそんでくれたのです。わたしは、それでもうれしかったです。でも、

わたしは、この二人の女の子以外のともだちがなか間に入ってくると、なぜかあそべなくなりました。二人の女の子は、わたしとあそんでいる時よりも、ほかのともだちとあそんでいる時のほうが、とても楽しそうに見えたのです。

二学きになった時、おかあさんは「ようちえんでも、まきとあそんでいいわよ」と言いました。わたしの顔が、きつとかなしそうだったから、そう言ったんだらうなって今考えます。わたしは、二人の女の子には「ありがとう」とずっと思ってきました。でも、先生はおかあさんに言われて、しかたなく二人にたのんでくれたんだと思えてしよつがありません。だけど、そんなふうに考えるのはよそつって、今、一生けんめいじぶんに言い聞かせています。

わたしは、さいきん気がついたんだけど、先生は、わるい先生じゃなかったのかもしれない。いい先生だったのかもしれない。「大きくなったら、先生とけっこんするんだ」と言っていた男の子がいました。わたしは四人ぐらいしています。「先生のこと大すきだから……」と言っ

て、先生のしごとの手つだいを、いつもしている女の子もたくさんいました(わたしも、「お手つだいますか」と三回ぐらい言ったことがあるけど、その時はいつもしごとがおわっていました)。

先生は、だれにでもやさしい先生だったとおもいます。もちろん、わたしにもやさしかったのかも知れません。わたしがなくと、かならずだっこしてくれました。わたしは、そのだっこが、「なかなかでちょうだい」のだっこに思えてきらいでした。でも、あれは、先生のやさしさだったのかも知れません。わたしは、心がきつくて、先生のやさしさが見えなかったのかも知れません。わたしは、そういうことに、今ごろ、気がつきました。でも、どうしても、先生は、わたしにとっては何もわらない先生だと、今でも本当は思っています。

人をわるいと思うのはいけないことです。人をわるいと思う人間は、じぶんもわるい人間になってしまうと思います。わたしは、先生をわるいと思うのはやめようと、何十回も何十回も思いました。でも、なかなかやめられません。これが、わたしの心の中に、今ものこるへんなものです。

わたしは、心のびょういんがあったら、いってなおしたいです。

わたしは、ようちえんにかよっている間、おとうさんにもおかあさんにも、「だっこして」と言えませんでした。「『だっこして』と言ってごらん」と言われても、言えませんでした。だっこしてもらおうと、うれしくてたまらないのに、もっともっただっこしてほしいのに、それでもやっぱり「だっこして」と言えませんでした。

わたしは、もう一つ言えなかったことがあります。わたしは、マクドナルドのハンバーガーが食べたかったのです。ようちえんで、みんなが、「マクドナルドで何食べたあ」なんてはなししているのをきいたり、となりのいえのマークくんが、マクドナルドのおまけのおもちやを、たくさんもっているのを見たのです。わたしは、年中のころから、ずっとマクドナルドが食べたかったけど、おねだりできませんでした。マクドナルドはたかいだろうと思いました。おとうさんは、マクドナルドは食べない人だろうと思いました。

わたしは、ようちえん生の時はつらかったから、ちゃあんとしたじぶんになれなかったのだと思います。かなしいじぶんでした。

わたしは、まい日、ようちえんのもんをくぐる時、おかあさんとわかれのあく手をして、「がんばるぞ」と思いました。それは、元気な「がんばるぞ」じゃなくて、心の中でなきながら言う「がんばるぞ」です。わたしは、いえにかえってきてても、うーんとがんばっていて、おとうさんにもおかあさんにもあまえることができなかつたのだと思います。

今考えると、わたしの「がんばるぞ」は、本当の「がんばるぞ」ではなかつたと思います。「つらいのがんばつてがまんするぞ」の「がんばるぞ」だったので。わたしは、へんなものかいつぱいで、じぶんじしんもまわりの人も、何もかもちゃあんと見ることができなかつたのだと思います。わたしは、だれにもあまえないで、心をきつくしてぼろぼろなっていただけだったのかもしれない。だから、いくらがんばつても、つらいことばかりだったのだと思います。わた

しのがんばりは、がまんするだけで、本当のがんばりにつながらなかったのです。わたしはゴーストだっただけです。

三、きせき

ゴーストにはきせきがありました。「きせき」ということばを、わたしのもっている国語辞典でしらべたら、「ふつうでは、とても考えられないような、ふしぎなできごと」と書いてありました。

わたしもきせきがあったかというわたしにはありませんでした。でも、ようちえんのそとで、つえんしきのあとのわたしの気もちには、まるできせきがあったみたいでした。

そつえんしきがおわって、いえにかえってきてせいふくをぬいだ時、もうこのせいふくはきな

くてもいいんだなと思ったら、ほっとしました。おとうさんに、「よくがんばったな」と言われて、もうようちえんにいなくてもいいんだなと思ったら、うれしくなりました。その日、わたしは、がんばって、「おかあさんだっこして」と言ってみました。そしたら、おかあさんは、とってもにっこして、「ぎゅっ」とだっこしてくれました。そして、「さきちゃん、だっこして」と言えたじゃない」と、とってもうれしそうにいました。つぎに、もう一回がんばって、「おとうさん、だっこして」と言うと、おとうさんは、「まってたぞ」というかんじでわらってだっこしてくれました。うれしかったです。それからすぐあとの日曜日、こんどはだっこの時よりがんばって、わたしは、おとうさんに言いました。「マクドナルドのハンバーガーが食べたいのでかってください」「いいよ」「おとうさんはあっさり言いました。わたしはびっくりしました。そんなにかんたんに「いいよ」なんて言われると、わたしはびっくりするタイプです。おとうさんは、あれから時どき、マクドナルドのハンバーガーをかってくれるようになりました。「かおうか」

というのはおとうさんです。わたしは、ちょっとわるいなあと思いながらもにかにかして、「いよいよ」とこたえます。

わたしは、ようちえんをそつえんして、「だっこして」と言えるようになりました。おねだりもできるようになりました。人は、つらいことをぬけ出すと、らくになるのだと思います。わたしは、じぶんが、元気になったことに気がつきました。「さきがね、とつてもあかくなつたのよ。まるでべつ人のようなのよ」と、いつもより元気なすこし大きなこえで、おかあさんが、おばあちゃんにでんわしているのを、わたしは聞きました。「まるでべつ人みたいね」おかあさんは、わたしにも、よろこんだ顔でそう何回も言いました。それを聞くたび、わたしは、ほんとうはべつ人になつたわけじゃないけど、じぶんでもかわつたと思ひました。いつも心の上にかぶさっていたつらいこと、くるしいことがぶつとんで、からだがかつ手におどり出しそつになるのです。何だかわからないけど、うれしくて楽しくて顔がにこにこしてしまつのです。きつかった心が、ゆるんだん

だと思いました。ようちえんをぬけ出して、かなしいじぶんをそつぎようしたのだと思いました。

四月十日、わたしは、元気に小学校に入学しました。

わたしのクラスのたんじんの先生は、おか田ひとみ先生といって、まるい顔にめがねをかけた、び人であかるくておもしろい先生でした。入学しきの日、おか田先生がさいしよにじこしようかいした時から、どうしてかわからないけど、わたしのこと、わかってくれるかもしれない先生だと思いました。わたしは、おか田先生に、わたしとあく手してほしいと思いました（ようちえんの時だったら、だっこしてほしいと思ったとおもいます）。

入学しきがおわって、教しつで、みんなで「さようなら」をしたあと、すぐにかえろうとするおかあさんに、わたしは、「ちょっとまって」と言いました。その時、おか田先生は、教しつのみえのほうにいて、みんながかえるのを見おくっていました。わたしは、一人、おか田先生のところまでいきました。「先生、さようなら」わたしが右手を出すと、おか田先生はにっこりし

てあく手をしてくれました。わたしは、おか田先生は、わたしのこと、わかってくれる先生だと思いました。わたしは、本当はまだ、ともだちができるかなあと、すこししんぱいだったのだけど、おか田先生が、「きっとおともだちできるよ」と言っているような気がして、「がんばるぞ」と思いました。もちろんそれは、元気な「がんばるぞ」です。わたしは、この日から、おか田先生が、ずっと大すきです。おか田先生と、とつてもなかよしです。

入学しきのつぎの日、わたしは、がんばって、すぐちかくのせきの男の子に「おともだちになってね」と言ってみました。するとその子は、うれしそうに、「いいよ」と言いました。それから、わたしが、「おともだちになってね」と言おうとすると、そのまえにみんなのほうから、「おともだちになってね。よろしくね」と言ってくれました。そうして、わたしは、いつの間にか、ともだちがいっぱいできました。ともだちとあそぶのはむずかしいと思っていたのに、ともだちとあそぶのはかんたんでした。気がついたら、わたしは、ともだちとあそんでいました。校てい

で、キヤーキヤーわらいながら、みんなとかげふみをしていました。わたしが、一年生になってがんばったのは、さいしょのともだちに「おともだちになってね」と言った時だけでした。あとは、ふつうにしていただけで、ともだちはどんどんふえました。わたしは、ともだちと、まい日楽しくあそびました。

しょぼんしょぼんしたようちえん生は、元気であかるい一年生になりました。

じつは、わたしは、ようちえんの先生やともだちのことは、あんまり、思い出したくなかったので、わすれようと思っていたのだけど、このごろ時どき考えます。ようちえんの先生は、わたしは、「だっこしてください」と言ったらにこにこだっこしてくれたのかもしれない。ようちえんのともだちは、わたしが、「ともだちになってね」と言ったら、ともだちになってくれたのかもしれない。わたしが心をきつくしていたから、ようちえんの時わたしは、だれともなかよしになれなかったのかもしれない。わたしは、じぶんがわるいのに、人をわるいと思っ

てきたのかもしれない。そういうことに気がついた今、わたしは、とてもかなしいです。

ゴーシュが本当のゴーシュにもどった時、わたしは、（めでたし、めでたしです）と言いました。でも、本当のゴーシュにもどったゴーシュが一ばん先にしたことは、かつこうに、「すまなかつた」とあやまることでした。わたしは、ゴーシュも、今のわたしのようになしなかつたんだろうと思います。わたしのかなしさは、はんせいではなくこうかいです。わたしは今、ようちえんの先生にとてもわるいことをしたと、こうかいしています。

本当のじぶんじゃない時は、じぶんじしんもつらいけど、まわりの人もきずつけて、まわりの人にもつらい思いをさせているのかもしれない。

わたしは、もうこうかいしたくないと思います。わたしは今、本当のじぶんです。本当のじぶんをちゃんと見て、そのじぶんをたいせつにしてなくさないようにしたいと思いました。

わたしは、いつかようちえんの時の先生に会うことがあったら、「あく手をしてください」と

言いたいと思います。その時わたしは心の中で、（めでたし、めでたしです）と、じぶんに言うてやろうと思います。

四、まちがいに気づくまで

わたしが一年生になってから、いもうとのまきは、時間わりをそろえる手つだいを、いつもしてくれます。つぎの日の教か書やノートをもってきてくれるようにたのむと、本だから、「これ？」と言いながらもってきます。「えんぴつをけずるのはまきのかかりだよ」と言って、まい日一生けんめいけずってくれます。まきは、どうやらわたしのことが、うらやましいみたいです。

「おねえちゃんはおべん強の本やノートをいっぱいもっていていいな」「赤いふでばこに、かわいい絵のついたえんぴつを五本もいれていいな」小学生になったら、教か書やノートはふ

つうのことで、えんぴつ五本だって十本だってかندوقなんかしないし、かんけいがないって気持ちになってしまいます。それなのに、今のまきはとってもかわいいです。「まきはかわいいね」と言うと、「うん」とへんじをします。「どこがかわいいかわかるの」と聞くと、「わからない」と答えます。そんなまきが、わたしはますますかわいくなります。

一学期がはじまって、まきは、また時間わりの手つだいを、はりきってにこにこことはじめました。「まきはかわいいね。まきがこのまま大きくなってくれたらいいのにな」と、ひとりごとを言っていると、おかあさんが、「まきがこのまま大きくなったらたいへんだよ。まきは四さいのかわいさで、さきだって六さいのかわいさがあって、二人ともかわいいわよ」と言いました。わたしは、「かわいい」というのはようちえん生をほめることばだと、その時思っていました。小学生をほめる時は、「いい子」とか「おりこう」と言うと思っていました。それなのに、小学生のわたしが「かわいい」と言われるなんて、おかしいなあと思いました。

わたしが、「おかしいぞ」という顔をしたのだと思います。「人間はいくつになってもかわいいのよ」とおかあさんがまた言いました。わたしはびっくりしました。わたしは、おとなになっただんだんかわいくなるって思ってきました。おとなになったら、あまえるのはいけないと思ってきました。そのことをはなすと、おかあさんは、「ぜったいにあまえない人よりもあまえることのできる人のほうがいいと思う」と言いました。「おとなになってもあまえていいの」「もちろんよ」わたしは、またびっくりしました。

「おとなになってもあまえていい」なんてきゆうに言われても、こまります。おとなの人があまえているところなんて、わたしは見たことがありません。おかあさんは、おとうさんに、食きとか、ようぶくとか、りょうりをつくるどうぐとか、バッグとかをかってもらっているから、それがおとなのおねだりなのかな。おとなは、わたしの見ていないところで、だっこしてもらったり、おんぶしてもらったりしているのかな。わたしは、そんなことを考えました。

わたしは、おとなになったら、あまえられないと思います。大きくなっておもたくなったら、あまえられる人がたいへんです。わたしは、今だって、小学生になって、たいじゅうもふえておもたくなつたから、だっこやおんぶをしてって、あまり言わないようにしているのです。だっこをしてもらうと、あつたかくて、とてもいい気持ちになるけど、それと同じくらいわるいなあと
いう気持ちになってしまいます。おねだりだって、人にねだってかってもらうことだから、わるいことだとおもいます。わたしはまだ、はたらいっていないからなにもかえないので、ほしいものがある時は、いつもおねだりします。でも、なんでもおねだりするのではなく、ねだんはたかくないか、くだらないものではないかを考えてからねだっているのです。そして、かってもらうととっでもうれいす。だけど、心のもうはんぶんは、かってもらっちゃってよかつたかな、わるいなあとという気持ちになります。

わたしは今まで、ゆび五本ぶんあまえて、あとの五本ぶんは、いつもがまんしてきたと思いま

す。もっと大きくなったら、もっとがまんして、あまえるのをやめようと思ってきました。わたしは、このやりかたを、今まで、正しいと思ってきました。わたしは、心の中で、「おかあさんの言うことは、うそだ、うそだ」とさげびました。

十一月のことです。学校で、「セロひきのゴーシュ」のビデオを見ました。おか田先生が、「みやざわけんじ」という人が書いたおはなしだと教えてくれました。わたしは、その日、町の図書館へ行って、その本をかりてきて読みました。ビデオを見たときよりも、もっともっとかんどうしました。ゴーシュは、ようちえん時だいのわたしとそっくりでした。わたしは、本を読みながら、わすれようと思っていた、ようちえん時だいのじぶんをじゅんばんにもう一ど思い出して、色々なことを考えました。それから、今のじぶんは、ようちえん時だいとくらべると、「上でき、上でき」と思っていたのだけれど、まだまだしゅぎょうが足りないことに気がつきました。

「あまえることのできる人のほうがいい」

と言われて、「ちがう、ちがう」と思ってきたけれど、おかあさんの言うことは、本当かもしれない。「あまえる」ということが、だっこやおんぶやおねだりのことだとか、わるいことだとか思ってきたのは、おおきなまちがいだったと思いました。

五、木と小とり

「セロひきの「ゴージュ」を読んでから、一、二、三日たったある日のことです。

「まえに、「あまえられる人のほうがいいと思う」と言われて、ずっと、ちがう、ちがうと思っていたんだけど、おかあさんが言うことがわかったよ」と、わたしが言うと、おかあさんは、「えっ、そんなことずっつと考えていたの」と、おどろいたようなこえで言ったあと、うれしそうにっこりしました。それから、「さきに、いつか読んでほしいと思って書いたのよ」と言っ

て、ようちえんしゅうりょうの記ねん文しゅうを、わたしにくれました。見ると、「いつだって、がんばりやさんのあなただけど、つかれた時は、いつでもあまえていいのよ。あなたがとつても大すきな」と、おかあさんのことばがのっていました。

おかあさんが、わたしをたくさんあまえさせたのに、わたしがわるいとかっ手に思っただつとあまえなかつたんだと思いました。たとえば、だつちはずつとめいわくだと思ってきました。でも、今だつちはいいことなんだなって思います。だつちしてもらっている人も、だつちしている人も、心があつたかくなるのだとわかつたのです。

「おかあさんはね、さきがいつあまえてきてもいいように、いつでもさきがあまえてくるころをあけてまっているの。見えなかつた？」と、おかあさんは聞きました。

わたしは見えなかつたのです。でも、今は見えます。わたしがあまえるとあたたかくていい気持ちになるのは、おかあさんとおとうさんと、おじいちゃんとおばあちゃんと、まきとぬいぐる

みと、おか田先生です。

「だったらそれは、みんないつも、さきがあまえていいばしょを、作ってまっつててくれているんだよ。だからさきは、一生けんめいがんばって、がんばってつかれたら、そこに休みにいけばいいんだよ」と、おかあさんが言いました。

おかあさんたちが木で、わたしは、大きくなるためにたびをしてる小とりみたいだと思いました。

わたしのしごとは、大きくなるために、がんばって色んなことを学ぶことです。わたしは、このしごとは、大きくなるために、がんばって色んなことを学ばないけません。このしごとは、わたしのこれからがかかっていきます。わたしは、わたしがどんな人生をあゆむのかわかりません。先のことを考えるのってちょっとむずかしいです。だけど、わたしはりっぱな人になりたいです。わるいことをしないで、いいことをまもる。人にやさしいりっぱな人です。りっぱっていうのも、むずかしくてよくわからない

いけど、わたしは、子どもだから、「まあ、いいか」と思うことにしました。

小とりと木はなかよしだから、小とりがにこにこしていたら、木もにこにこしてくれていると思います。それは、心の山びこです。にこにこが、いつたりきたりします。顔は心の手紙です。

わたしは元気にすごします。かなしいことやつらいことがあったら、じぶんでがんばってかいけつしたいと思うけど、心にうそをつかないで、つかれた時は木のえだでちゃあんと休みます。そうして元気になって、ピーツととんでいきます。木がつかれている時は、わたしは木の下でいっしょにねむります。子もりうたをうたってあげたいです。だって、木も小とりも、りょうほう元気でなければいけません。かたほうがかなしいと、りょうほうかなしくなってしまう。

人は、みんな、心と心をくっつけ合って、生きていくのです。でも、くっつけすぎには気をつけて、みんな元気な時ははなれて、じぶんのことをちゃあんとするのがいいと思います。

わたしは、がんばって大きくなります。